

イエフによるヨラムとアハズヤ殺害主張の背景（長谷川）

## イエフによるヨラムとアハズヤ殺害主張の背景

— 歴史叙述的観点から —

長谷川 修 一

キーワード

イエフ ハザエル アラム語碑文 列王記 歴史叙述

### 序

一九九三年七月二三日、イスラエル北部に位置するテル・ダン遺跡で、古アラム語の刻まれた碑文の断片が発見された（以下、「テル・ダン碑文」）。翌年、同碑文のさらに二つの断片が同遺跡から発見された。現存する同碑文の断片に著者の名前は記されていないものの、この碑文の作成者は紀元前九世紀にアラム・ダマスカスの王であったハザエルであると考えられる。ハザエルは同碑文に、イスラエル王ヨラムとユダ王アハズヤを殺害した、と記録している。聖書は、これに対し、この二人の王の殺害がイエフによっ

てなされた、と記している。イエフはヨラムの王位を篡奪し、イスラエル王国に自分自身の王朝（以下、「イエフ王朝」）を創立した人物である。では、誰が一体、ヨラムとアハズヤの真の殺害者だったのだろうか。本研究はこの疑問に関する諸説を概観し、それらの説の方法論的な有効性を再検討した後、一つの回答を与えることをねらいとする。こうして真の殺害者を決定した後、なぜ片方の史料が二人の王の殺害者について虚偽の主張をしたのかについて、歴史叙述的観点から考察する。

## テル・ダン碑文の著者

現存するテル・ダン碑文の断片に著者の名前が言及されていないため、同碑文の著者をめぐって研究者の間で議論がなされてきた。碑文の公刊者はこの碑文がアラム・ダマスカスで紀元前九世紀後半に活躍したハザエルによつて作成されたものと考え、現在多くの研究者がこの説に従っている。<sup>②</sup>この仮説は、主として碑文中に登場する二人の王の名と、碑文の著者が彼らを殺害したという碑文の記述に基づいている。二人の王の名はどちらも破損しているが、聖書の記録を援用して破損部分の復元が可能である。一人の王はイスラエルの王で、その名が「ラム (ram)」で終わり、もう一人の王は「ダビデ家の王」で、その名前が「ヤフ (yah) 」で終わる。聖書の記録に基づけば、この二つの名前の組み合わせが同時代に起こりえたのは、イスラエルのヨラムとユダのアハズヤを除いてあり得ない。実際、この二人の王は、トランスヨルダンのラモト・ギレアドで肩を並べてアラム・ダマスカスのハザエルと戦ったことが聖書の列王記（以下略称、列王記上Ⅱ王上、列王記下Ⅱ王下）の中に記録されている（王下八章28節）。イスラエルとユダが共に戦ったことは、歴史的に見て、二つの王朝が婚姻関係にあったオムリ王朝の時代に十分にありうること

である。それゆえ、イスラエルのヨラムとユダのアハズヤがテル・ダン碑文に言及されていることは、二人がアラム王ハザエルと戦ったと記録する王下八章28節の記述と一致する。<sup>③</sup>

テル・ダン碑文の著者がハザエルであることは、同碑文の断片が発見された層の考古学的文脈によつても裏付けられる。それら断片は紀元前八世紀に年代づけられる建物の資材として再利用されている。これは、すなわち、ハザエルが活躍した紀元前九世紀後半の直後の時代である。<sup>④</sup>このことは、同碑文が、ハザエルの死後にアラム人の敵によつて破壊されたことを示している。テル・ダン碑文はおそらく、紀元前八世紀前半、イスラエルがアラムの支配から脱し、その衰弱から回復した後、イエフ王朝のヨアシユ（イエフの孫）かヤロブアム二世（イエフの曾孫）によつて破壊されたものだろう。破壊後、碑文の断片は建物の資材としてすぐさま再利用されたようである。

テル・ダン碑文と列王記の両方にヨラムとアハズヤによるハザエルとの戦いが記録されていること、また、同碑文断片が発見された遺跡の層の考古学的文脈を考慮に入れると、テル・ダン碑文著者の最有力候補はハザエルであると言えよう。

## 真の殺害者をめぐる論争

上記のように、テル・ダン碑文の著者はハザエルであったであろうと思われるのだが、この同定によって、テル・ダン碑文のテキストと列王記のそれとの間に矛盾が生じてしまう。王下九章24、27節は、イエフがヨラムとアハズヤを殺害した、と述べている。一方、テル・ダン碑文の作者は、自分が同王たちを殺害した、と碑文中に誇示している。

この矛盾ゆえに、Wesselius (1999) はテル・ダン碑文の作者がアラム王ハザエルではなく、王下九章に描かれるように、イスラエルの王イエフである、と唱えた。しかし、Wesselius の説は、彼がほとんど史料批判を経ずに聖書の記述を史料として用いているため、受け入れられない<sup>5)</sup>。

他の研究者は、テル・ダン碑文のテキストと王下九章の聖書物語とを調和させようと努力している。碑文の公刊者である Brian と Naveh (1995:18) は、ハザエルが、イエフをして二人の王を殺さしめ、イエフを単なる殺害実行人としてしかみなしていなかったため、二王殺しを自分の功績としたのだ、と論じた。同様に、Schmiedewind (1996:83-85) は王上一九章15-18節のテキストをイエフとハザエルの間の共謀についての示唆とみなし、バリーフ川流域の住民が自分たちの王を殺害したのを、あたかも自分が殺したか

のように記録したアッシリア王の並行例を同時代のアッシリア王碑文から引用している。しかし、Schmiedewind の理論は、実際にはその碑文の誤読に基づいており、論じるに値しない<sup>6)</sup>。

テル・ダン碑文中で用いられているアラム語動詞の意味の新解釈に基づき、Yanada (1995:618-21) は別の調和的解決策を提示している。彼によれば、王は通常堅く守られているので、野戦において戦死することは稀だったと考えられる。このことを踏まえると、二人の王が一つの戦いで同時に命を落とすことは驚愕に値する。Yanada はさらに、公刊者によって修復されたテル・ダン碑文六行目の記述、すなわち、ハザエルが実際に「七十人の王」を「殺した」かどうか、ということについても疑問を投げかけている。このような点を考慮に入れ、Yanada は、同碑文六、八行目、そしておそらく七行目にも用いられているアラム語の動詞 *qatal* を「打つ、打ち負かす」と解釈した。これは、この動詞の一般的な訳「殺す」と対照的である。この解釈は、アッシリア王碑文中に用いられるアッカド語の動詞 *dānu* との類推に基づいている。もしこの仮説を受け入れるなら、ハザエルは王下八・九章が述べるようにラモト・ギレアドでヨラムとアハズヤを打ち負かし、その後、イエフが同王たちを殺害したことになる。しかし、この仮説は、Yanada

が引用するアラム語の例がテル・ダン碑文よりも随分後の時代のものであること<sup>11)</sup>、そしてアッカド語の動詞 *dāku* はアラム語動詞 *qatal* について何ら裏付けるものではないことから、根拠が不十分であると言えよう<sup>12)</sup>。

これら調和を求める見解は脆弱であるだけでなく、以下の四つの点で当時の歴史的状況と矛盾を引き起こす。第一に、ハザエルが、自分が関与しなかった事件について碑文の中心に記録したとは考えがたい。第二に、紀元前八四一年、ハザエルはアッシリアと戦い、領地に多くの損害をこうむったものの最後まで屈服しなかった。一方、イエフは、まさにこの年にアッシリアに貢納する道を選んでいる。これは、ダマスカスとイスラエルがアッシリアに対して全く異なる態度を取っていたことを示している。第三に、列王記は、ハザエルがイスラエルを攻撃し、その多くの領地を征服した、と記述している(王下一〇章32―33節)。これは、アラムとイスラエルが当時敵対関係にあったことを示している。第四に、もしイエフがヨラムを殺していたなら、アッシリアの碑文でイエフを「オムリの息子」と書くことはなかったはずである。なぜなら、ヨラムはオムリの孫に当たるからである<sup>13)</sup> (Lipinski 2000:380)。これらの事実はハザエルとイエフが同盟していたと主張する前述

の仮定と矛盾する。

調和的理論がこのように歴史的状況と矛盾を生じさせることから、必然的に、二つの史料のうちのどちらかがヨラムとアハズヤの虚偽の殺害者を主張していることになる。どちらが虚偽の殺害者を主張しているのかを決定するためには、二つの史料の性格を検討せねばならない。テル・ダン碑文は王碑文で、王の業績を記念して作られている。作られた年代は、遅くとも、描かれている出来事から三十年以内、まだ作成者である王が生きている時代であったはずである。それに対し、列王記のヨラム・アハズヤ殺害を描くテキストの現在の形(王下九章1節から一〇章28節、以下「イエフ物語」)は預言者エリシャが関係する、明白な預言者物語である。列王記中の預言者物語は明らかに小説風の物語で、その文学的ジャンルゆえに、その中に歴史的出来事の正確な描写を求めることはできない。さらに、これらの物語は長年口伝で受け継がれ、その後ようやく収集されて書き記された。それゆえ、口伝から、紙上に書き記した段階で大きな変化が生じたであろうことも考慮に入れるべきである。したがって、このような資料を歴史史料として用いる際には厳密な史料批判が必要であり、その史料の内容が同時代史料と食い違う場合にはより一層の批判的分析を経ねばならない。

イエフによるヨラムとアハズヤ殺害主張の背景（長谷川）

上記のような調和理論とは対照的に、Na'anana (1997a:115-116; 2000:101-104) と Lipinski (2000:379-80) は、ヨラムとアハズヤの真の殺害者決定に際してテル・ダン碑文のテキストの記述を採択した。Na'anana はラモト・ギレアドで二人の王を殺害したのはハザエルで、イエフはオムリ王朝の残党を抹殺して実権を握った、と論じている。同様に、Lipinski (*op. cit.* 379-80) は王下九章の物語と同八章28節の短い報告の間に矛盾を見出している。後節は「アラム人がヨラムを『打った』と記している。Lipinskiによれば、王下九章はヨラムとアハズヤの殺害をイエフがしたことである、とされているのに対し、王下八章28節は、「アラム人がヨラムを殺害した」と記録している、と解釈すべきである。なぜなら、王下八章28節で用いられているヘブライ語の *na* という動詞のヒフィル形は、戦いの文脈において一般的に「殺す」という意味だからである。Lipinskiの意見では、王下九章の描写は預言者の伝承に基づくのに対し、王下八章28節は「ユダヤの王の年代記」に基づいている。その結果、後者のテキストは前者のそれよりも史料としての信憑性が高い。Lipinskiはさらに、アハズヤの負傷と死を描く王下九章27b節—28節もアハズヤが実際にラモト・ギレアドで死んだという信憑性のある歴史的情報を残している、と考えている。したがって、ヨラ

ムとアハズヤをイエフが殺害した、とする王下八章29節と九章15節はユダ年代記の記録（王下八章28節）と預言者伝承（王下九章）との間の矛盾を融和するための編集的な挿入節に過ぎない。それゆえ、これら二つの節は史料としては用いることができない。

Na'anana と Lipinski の理論は方法的に正しい。イエフ物語は、それが書き記されてから、また、それ以前すでに、口伝が初めて書き記されるようになる前に、多くの編集・挿入を経たであろう二次史料である。それに対し、テル・ダン碑文は一次史料であるがゆえに、そちらに史料としての優先権を認めなければならない。

## イエフ物語の成立

ハザエルを真の殺害者とする、新たな疑問が浮かび上がる。それは、イエフ物語がなぜヨラムとアハズヤの殺害をイエフに帰しているのか、という疑問である。この疑問に答えるためには、イエフ物語がなぜ書かれたのかを考察しなければならない。そのためには、イエフ物語成立の場所と年代を考慮する必要がある。ここでは現存するイエフ物語の成立時期ではなく、申命記史家が史料として使ったと仮定される「原イエフ物語」の成立場所・年代を考慮

する。原イエフ物語の範囲については細部において諸説あるが、ここではテキストの文学的批判研究に基づき、王下九章1—6 a、10 b—27 a b α、30—35節、十章1—6 a、7—9、12—17 a α、18—19 a、20、21 a β b—25 a、28節とする。原イエフ物語の起源を決める鍵は、同物語中に顕著な、イエフのクーデターを正当化しようとする傾向である。一、同物語はイエフがヤハウエ神の命により、王として油注がれたと記している（王下九章3、12節）。二、クーデターは預言者（王下九章1—3節）・軍の高官たち（同九章13節）・ヤハウエ神の熱烈な崇拜者であるレカブの子ヨナダブ（同一〇章15—16節）の支持を得ている。これら支持者への言及は、原イエフ物語がイエフの革命を正当化することを意図したプロパガンダ的要素を強く持っていることを示している。したがって、この物語の作者が、イエフ革命を正当なものとし、その結果に対して同情的であった、と考えることができるだろう。このような見方をしていた人間は、イエフ王朝の宮廷と親密な関係にあった存在か、宗教的な見地から（回顧的に）イエフの行動を好ましいと思った人間であろう。同物語の洗練されたスタイルと構造は、それが非常に教養のある人間によって作成された、あるいは、少なくとも装飾されたことを示している。これらすべてを考慮に入れると、原イエフ物語成立の

もつとも妥当な場所はイエフ王朝の宮廷であった、と言えるだろう。

物語成立の年代を決定するのに、物語中の二つの要素を考慮に入れねばならない。一つはイゼベルの罪とヨナダブの重要性について、物語中にその詳細が欠如していることである。これは、原イエフ物語の読者が、これらの人々についての知識を持っていたことを示している。二つ目は、北王国における革命の正当化である。この正当化は王下九章22節中のイエフの言葉、「あなたの母イゼベルの姦淫とまじないが盛んに行われているのに、何が平和か」に要約されている。この言葉によって、同物語は、イゼベルによって導入されたバアル崇拜がイエフ叛乱の理由であったと明確に主張している。同革命は宗教改革を以ってその最高潮を迎える（王下一〇章18—25 a節）。王下九章22節の革命の正当化は、同革命の正当性を訴える他の部分とともに、物語成立当時、イエフの革命を正当化する必要があったことを示している。これはおそらく革命の正当性に疑問を投げかける人々が存在したからであろう。これらの理由で、原イエフ物語のテキストはイエフ王朝時代に年代づけられる。

イエフによるヨラムとアハズヤ殺害主張の背景（長谷川）

## イエフを二王の殺害者とする歴史叙述的背景

原イエフ物語成立の場所と年代を決定した今、同物語の著者がなぜ二王殺害をイエフに帰したのかを論じる基盤ができた。Naʿaman (1997a:116; 2000:104) はこの理由を、歴史的記憶の正確さと説明している。つまり、イエフ物語が申命記史家の手を経る頃には、ヨラム・アハズヤ殺害に関する歴史的記憶がもう不正確になってしまったためである、という主張である。こう論じるに際して、Naʿaman は申命記史家が列王記に組み込んだ時点でのイエフ物語のみを扱っており、原イエフ物語を考慮に入れていない。確かに申命記史家がイエフ物語を列王記に組み入れたのは二王殺害事件よりもずっと後、少なくとも二百年以上後のことだっただろう。しかし、前述のように、原イエフ物語は、二王殺害からあまり時を経ずして書かれている。これに加えて、同物語は登場人物の称号だけではなく、彼らの名前をはっきりと使用している。この特徴は、王上二〇章、二二章、王下三章など、イスラエル王をその称号でのみ呼ぶ、イスラエルとアラム、モアブの戦争とを描く他の話とは一線を画している。このことは、それらの王の名前が原イエフ物語に最初から登場していたことを示しているだろう<sup>26</sup>。したがって、物語が書かれた時点で歴史的記憶がすで

に不明瞭になっていた、とは考え難い。イエフ王朝の宮廷、という同物語の起源を考えると、物語はイエフを意図的に真の殺害者に仕立て上げていると考えてよいだろう。

列王記中のオムリ王朝の王たちに対する数多くの非難の言葉（王上一六章25—26節、30—33節、一八章18節、二二章25節）、また、「アハブの家（アハブはオムリの息子）」の来たるべき失墜についての予言（王上二〇章42節、二二章19—24節、29節、二二章53—54節、王下一章16節、三章2—3節）はすべて、紀元前七世紀終わりに活躍した申命記史家<sup>27</sup>が、それよりもさらに後代の筆者によって書かれたのは明らかである。しかし、オムリ王朝の繁栄はその支配下にあった北王国の住民の犠牲の上に成り立っていたことは容易に想像できる。このため、当時の北王国の住民の中にはオムリ王朝に不満を持っていた人々も少なくなかった、と仮定してよいだろう。原イエフ物語の中で、イエフは自らの手でヨラムを殺害し（王下九章24節）、その殺害をある意味劇的に、人々の前で声高に叫んでいる（王下一〇章9節）。そして、負傷したヨラム自身は、わざわざイエフに殺されるためにイズレルの町から外に出てくるのである。このことはラモト・ギレアドでアラム人と戦った後、ヨラムはイズレルの町に決して戻って来なかったことを示しているかもしれない。Ipiniski が論じているように、

王下九章15節（八章29節も同様に）も、やはりこの事実を隠蔽しようとしているように見える。<sup>28</sup>このように見ると、イエフ物語の創作話的要素が前面に浮かび上がってくる。同物語はイエフの王位継承の正当性よりもイエフの宗教的熱狂をより強調している。ヤハウェ神崇拜の信仰という観点から見れば、「アハブの家」の王たちはバアル宗教に献身したがゆえに殺されねばならなかった。この背景を考慮に入れると、原イエフ物語の著者が、なぜイエフ自身がヨラムを殺した、と強調しているのかを説明できる。

これに加えて、イエフ王朝時代に成立した原イエフ物語の中で、ヨラムとアハズヤの殺害をアラム王ハザエルに帰さなかったもう一つの理由があったであろう。イエフ王朝の初期、イスラエルはアラムの支配下に置かれていた（王下一〇章32—33、一三章3、7節参照<sup>29</sup>）。ヨアシユとヤロブアム二世がアラム・ダマスカスからの独立を勝ち取った後でさえ、イエフの子孫たちは、イスラエルを圧迫したアラム人に対して敵対的感情を抱いていたであろう。したがって、イエフも彼の子孫も二王の殺害をハザエルに帰することを好まなかったであろうことは想像に難くない。イエフの叛乱を正当化するためには、背教したオムリ王朝の王たちは、アラム王ハザエルではなく、イエフ自身の手によって殺されねばならなかった<sup>30</sup>。つまり、原イエフ物語におい

ては、イエフはイスラエルから背教した王を殺し、バアル宗教をイスラエルから掃討した英雄として描かれているのである。しかし実際には、ヨラム・アハズヤを殺したのはイエフではなかった。イエフは、ハザエルによってヨラムが殺害された後、その機を逸せず、ヨラムに連なるオムリ王朝の関係者を粛清し、自らが王位に就き、バアル崇拜をイスラエルから一掃したのである。

## 結論

歴史を再構成する際、二次史料よりも一次史料が優先されねばならない。したがって、イエフをヨラムとアハズヤの殺害者とするイエフ物語の主張は虚偽のものである。原イエフ物語の意図は、イエフに二王の殺害を帰することにによって、背教したオムリ王朝の王たちを殺したイエフの宗教的熱情を強調することにあった。イエフ王朝成立時に存在していたアラム人に対する敵意が、おそらく二王の殺害を敵王ハザエルではなくイエフに帰したもう一つの理由であっただろう。



イエフによるヨラムとアハズヤ殺害主張の背景(長谷川)

## 註

- (1) Bran and Naveh 1993; 1995.
- (2) 最初の断片(断片A)が発見された時、碑文の公刊者(Bran and Naveh 1993:95-98)は、碑文の著者がハザエル、アダド・イドリノ属国であったベト・レホブかマアカノ王であると仮定した。この見解はAhitiv (1993)によって批判され、二年後のさらなる断片(断片B)の発見によってこの批判が正しいことが証明された。Bran and Naveh (*op. cit.* 86)はさらにベンハダドが著者であると提案し、この見解は Puech (1994)や Knauf, de Pury and Römer (1994)に支持された。Athas (2003: 255-65)もテル・ダン碑文の著者としてハザエルの息子バルハダド二世を提案した。しかし、彼の推測はテル・ダン碑文の二つの断片が、公刊者が接合した仕方では接合しえない、という見解に基づいている。Athasによる同碑文の接合についての提案は非常に独特で、一般に受け入れられていない。それゆえ、この碑文の著者がバルハダド二世である可能性は極めて低い。同様の見解は Gail (2001)によっても提出されている。Wesselius (1999; 2001)は同碑文の著者をイエフと同定しているが、この解釈は説得力に欠けている。なぜなら、碑文に用いられているアラム語が北イスラエル王国で当時書かれ、あるいは話されていた、と仮定するいかなる根拠もないからである。Becking (1999); Hafthorsson (2006:62-63) 参照。著者をアダド・イトリと同定する説が Dijkstra (1994)と Lipiński (1994)によって提出されている。ある研究者はすでに断片Bの発見前に碑文の作者をハザエルである、と考えていた(Tropper 1993; Halpern 1994; Margalit 1994)。この見解を

受け入れている研究者は、例えば Becking (1999:188, n. 6)である。

- (3) この聖書の記述は Otto (2001:50)が指摘しているように、何らかの歴史的記録、例えば「ユダの年代記」、に基づいているのかもしれない。

- (4) Bran 1996; 1999; 2002.

- (5) この説への批判については Becking (1999), Athas (2003:257)を参照。

- (6) 15「主はエリヤに言われた『行け、あなたの来た道を引き返し、ダマスコの荒れ野に向かえ。そこに着いたなら、ハザエルに油注いで彼をアラムの王とせよ。16ニムシの子イエフにも油を注いでイスラエルの王とせよ。またアベル・メホラのシャファトの子エリシャにも油を注ぎ、あなたに代わる預言者とせよ。17ハザエルの剣を逃れた者をエリシャが殺すであろう。18しかし、わたしはイスラエルに七千人を残す。これは皆、パアルにひざまずかず、これに口付けしなかった者である。』」

- (7) Dion (1999:152-53); Kotsieper (1998:488-92)も同様の見解。

- (8) Schniedewind の引用している例は的外れである。第一に、確かにアッシリアの王たちは、アッシリア高官の業績を自分の業績に加えているが、それは、まず軍事遠征における自分自身の業績を列挙した後、二次的なものとして区別して列挙している。Na'aman (1997a:115; 2000:102)を参照。Schniedewind の引用している例は、シャルマネセル三世の軍事高官であるダイヤン・アッシシュルが、シャルマネセルの晩年に率いた遠征の業績をダイヤン・アッシシュル

の業績として描いているものである(RIMA 3, A.0.102.14, 141b-190; A.0.102.16, 228-341)。同碑文の歴史的背景について、Yamada (2000:221-24, 321-34)を参照。第二に、Schiedewindが一人称単数だと解釈している動詞(*adûku* の変化形)は実際にはGAZというロゴグラムで記されており、それを彼は誤って一人称単数として翻訳している。この事件と同じ出来事が他の碑文中でGAZ-ku (*iûku*)と、三人称複数形を示す<sup>2</sup>と共に記されているのは本当だが、それらのテキストはSchiedewindが引用するテキストよりもっと後代に書かれたものである。黒色オベリスク(RIMA 3, A.0.102.14)はカラ出土の石像(同A.0.102.16)同様、シャルマネセル三世の治世第三年から三十二年に作成されたものである。Younger(2005:255-56)も参照。時の経過と共に、王は業績をさらに積み重ねていく。王が後代の業績をも自分の碑文に記しておきたいと願うのは自然なことである。そのため、古い日々の業績の詳細はしばしば後代の碑文では割愛される。例えば、バリーフ川流域の人々が彼らの支配者を殺害した動機に関して、その割愛の過程を見ることが出来る。この出来事は、シャルマネセル三世治世の早い時期に書かれた二つの碑文に言及されている。紀元前八五二年頃に書かれた碑文の中では、次のように述べられている。「彼らは私の威厳のある恐ろしさと私の凄まじい武器のきらめきに恐れおののいた」(同A.0.102.2)；そして、紀元前八四二年前後に書かれた碑文の中ではもっと簡潔に記録されている：「彼らは私の力強い武器を前にしておそれおののいた」(同A.0.102.6)。この記述はさらに後代の碑文中ではすっかり消えている(同A.0.102.14,

A.0.102.16)。Schiedewindが引用する碑文(A.0.102.10)もやはりバリーフ川流域の王殺害に関する動機についての言及が欠落している。この件に関する参考文献についてはYamada (2000:151)を参照。Yamada (*op. cit.* 147)は「この不明瞭さは後代のテキストにおける割愛によるもので、それによって支配者Giammuを殺したのが誰かが不明確になっている」と指摘している。

(6) Lipinski (2000:379-80)はこの見解を否定し、野戦において王が殺されたり負傷したりした例を挙げている。彼はエダのヨシヤ王がメギドの戦場でエジプトのフアラオと戦って戦死した<sup>3</sup>と解釈しているが、ヨシヤ王はメギドの戦場では殺されたのではないようだ。実際には、彼はエジプトの属国の王として、宗主であるフアラオとの会見の席で殺されたのである。

(10) Dion (1997:195)も参照。

(11) ダリウスのビスイトウン碑文のアラム語訳は紀元前五世紀に年代づけられる。

(12) この節に対する批判についてはNa'aman (1997a:118, n. 21)を参照。

(13) Irvine (2001:113-17)もこの見解を支持している。彼は、ヨラムとアハズヤの殺害をヤロブアム二世の宮廷において、イエフの叛乱を聖戦として示すためのプロパガンダと解釈している。

(14) Montgomery 1951:399; Campbell 1986:22-23, 99-101; Lehnat 468-70.

(15) この伝承はアハブ家の根絶をヤハウエ神によって選ばれたイエフに帰している(王上一九章16—17節、王下九章1

イエフによるヨラムとアハズヤ殺害主張の背景（長谷川）

— 6 節、10 b—14 a 節）。

(16) Otto (2001:50) 参照。

(17) Minokami (1989:154) はイエフ物語の起源が宮廷にあると推定している。なぜなら、イエフ王朝の宮廷こそが、このような親王朝的なプロパガンダを作り出す当然の場所であるからである。Na'aman (1997b:125; Irvine 2001) も参照。Steck (1968:47) と Schnitt (1972:31) はイエフ物語の起源をイエフの周囲の軍事的あるいは官僚的な集団である、と考へつゝ、Montgomery (1951:399) と Campbell (1986:22-23, 99-101) は、物語の起源は預言者集団であると推測している。

(18) 原イエフ物語の範囲については Steck 1968; Schnitt 1972; Würthwein 1984; Campbell 1986; Barré 1988; Minokami 1989; Otto 2001; Lehnart 2003 参照。

(19) 原イエフ物語の再構成について詳しくは、拙著 *Aram and Israel during the Jehuic Dynasty* (Ph.D. Dissertation, Tel Aviv University, forthcoming) の第一章を参照されたい。

(20) Sanda 1912:123; Steck 1968:32, n. 2; Schnitt 1972:31; Minokami 1989:154; Otto 2001:105. 他の見解については Würthwein (1984:327, 329-30) を参照。

(21) Irvine (2001:106-12) はイエフ物語がイエフ王朝の宮廷で、「特に、エリシヤ、征服、聖戦の伝統を保持し祝っていた、ギルガルのペカの支持者に向けて」作成されたとしている。(22) Otto (2001:75-96) は同物語が読者の注意を惹きつけるためいかによく構成されているか示している。Wellhausen (1905:279) はイエフ物語を「輝く宝石」と称している。

(23) Otto 2001:109-10。

(24) ホセア書一章四節は、イエフのクレーダーに対しておそらく反論があったであろうことを示している。

(25) ある研究者たちは、原イエフ物語がイエフの治世に書かれたと考えている (Sanda 1912:123; Minokami 1987:154)。この見解に従えば、イエフのクレーダーを正当化する強い必要はオムリ王朝の支持者がまだ残っていたであろう、事件の直後に存在していた。Montgomery (1951:399); Alt (1953:283); Steck (1968:32, n. 2) 参照。Schnitt (1972:29-30) は同物語をイエフ王朝の初期の王たちに時代に年代づけている。ある研究者たちはイエフ王朝の最後の王たちの時代に年代づけている (Jepsen 1934:73-74 「ヨアシユカヤロブアム二世」; Miller 1967:321-22)。Otto (2001:110-11) は最初の見解を以下の理由で不可能だとしている。「一、物語の語り手はオムリ王朝治下の恐怖と革命の動機を読者に思いつかせる必要を感じている。王下九章1—10、11—13、32 節、一〇章15—16 節。もしオムリ王朝時代の圧政が記憶によく残っていたなら、著者はそれに言及する必要はなかったであろう。二、ホセアの時代に、イエフの叛乱に対して疑問が投げかけられていた (ホセア一章4 節、七章3—7 節八章4 節)」。Miller (1967:321-22); Irvine (1995:499) も参照。ヤロブアム二世治下の領土拡大とそれに続く経済的成功はイスラエル社会に繁栄と不正義を同時にもたらした。これが、ヤロブアム二世の息子ゼカリヤ治世にイエフ王朝を転覆させた原因であったかもしれない。三、ハザエルの攻撃は王下九章14 b—15 a 節に簡潔に述べられているに過ぎない。このような描写は、アラム人の脅威が消滅したヤロブアム二世の時代になって初めて成しえた。九章14

b 節はヨラムがラモト・ギレアドにおいてアラム人に対して「守って」いた、と述べている。ラモト・ギレアドはヨラムの時代からヨアシユ治世の初期までアラム人の支配下に入っていたようであるので（八章28節）ヨラムが防衛していたことは、ヤロブアム二世時代の北王国の領土状況を反映している。八章28節によると、ヨラムはアラム人と「戦いに行った」（*qāṣṣ* : יָצָא）。「*qāṣṣ*」の組み合わせは九回聖書に登場する（サムエル記上一七章13節、王上二二章4、6、15節、王下三章7節、八章28節、エゼキエル書七章14節、歴代誌下一八章5、14節）。しかし、Ottoの見解は的を得たものではない。まず、イエフの叛乱を正当化するために、オムリ王朝治下の脅威の支配を強調することは重要なことである。特に、イエフの物語がもともと独立した一つの物語であったことを考えるとなおさらこのことは当てはまる。第二に、ゼカリヤ治世の叛乱の結果によって、オムリ王朝の子孫がイスラエルの新たな王になったわけではない。それゆえ、この叛乱をオムリ王朝に対するイエフの叛乱の正当化と結びつけることは必ずしも必要ではない。最後に、ハザエルの攻撃がごく簡潔に述べられていることはなんら不思議なことではない。同物語においてハザエルに対する戦争は主要なテーマではなく、導入部に過ぎない。Irvine (2001:106-12) はイエフ物語がヤロブアム二世時代に書かれたと述べている。彼によると、この物語はギルガルにいた、ペカの王権を支持する預言者たちに向けて書かれた。ペカはアラム・ダマスカス王レツインによって支持され、ギレアドにおいて離反を指導した。Irvine は、イエフ物語中で親イエフ的偏向が、イエフの像が預言者的

な色調で描かれていることに反映されている、と指摘し、次の四つの点を指摘している。一、イエフのイズレルへの進行が「狂ったようである」（*parat*、王下九章20節）は、あたかも彼が預言者の霊によって突き動かされているかのようであり、イエフに油注いだ預言者的「狂人」になぞらえられる。二、イエフの神の言葉の引用（王下九章25b-26a節）は彼があたかも預言者のように神の言葉を宣言しているかのようである。三、イエフのヨナダブに対する言葉（王下一〇章16節）とホレブ山におけるエリヤのそれとの類似性（王上一九章10、14節）。四、イエフの命令（王下一〇章14、24節）とカルメル山におけるエリヤのそれ（王上一八章40節）。イエフの言動と預言者の、特にエリヤの言動との類似点に加え、イエフ物語はアハブの家の根絶、つまり「聖戦」（*qōṣ*）を強調している（王下一〇章11、14、17a、21、24節）。「聖戦」とは敵の完全な根絶である（例えば、民数記二一章33-35節、ヨシヤ記八章18、22節、一一章14節、士師記三章29節、四章16節）。エリヤが伝承に強く結び付けられているギルガルは（王下二章1節、19-22節、四章38-41節、42-44節、六章1-7節、一二章20-21節）は、Irvine によれば、征服物語（ヨシヤ記四章19-24節、五章8-9、10-12節、九章6節、一〇章6-7、9、15、43節）に反映されているように、ギルガルはこの「聖戦」という考えの発祥の地であった。したがって、イエフ物語にエリヤが登場することは、エリヤをその創設者として仰ぐギルガルの預言者集団に特に訴えるものであった。しかし、イエフ物語がギルガルにいた預言者たちに訴えるように書かれた、という Irvine の説

イエフによるヨラムとアハズヤ殺害主張の背景(長谷川)

- はあまりに推測的である。まず、エリシヤを創設者とする  
と Irvine が考えるギルガルの預言者集団は、イエフ王朝の  
宮廷で書かれた、イエフの叛乱にエリシヤが関わっていた  
という話を受け入れなかったであろう。次に、ヤロブアム  
二世の治世中すでにペカがギレアドで離反した、という見  
解は非常に推測的である。いずれにせよ、十分な史料がな  
いため、原イエフ物語の正確な年代を決定することは不可  
能である。同物語はイエフ王朝の初期の時代のある時期に  
成立したであろう。聖書年代に従えば、イエフの革命から  
ヤロブアム二世の即位まで六〇年以上が経過している(共  
同統治を計算に入れず)。計六一年Ⅱイエフの治世二八年  
(王下10章36節)、ヨアハズの治世一七年(王下一三章1節)、  
ヨアシユの治世一六年(王下一三章10節)。Tadmor (1983)  
はエサルハドンとアッシュルバナニパルのアッシリア王碑文  
に類似例があることを示している。どちらの王も自分の王  
権を碑文の中で正当化している。しかし、それらの碑文は  
彼らの治世の最初に書かれたものではなく、もつとずっと  
後に、彼らの後継者が決定した時に書かれている。Irvine  
(1995:500, n. 17)は次のように述べている、「これらの弁解  
は、彼らの父祖たちの正当性を守ることによって、後継者  
の正当性を打ち立てようとしている」。
- (26) 王下九章27節が、アハズヤ殺害の時代にまだハザエルが  
達していないなかった地域の地理的描述を含んでいることは特  
筆に価する。
- (27) 本研究では申命記史家が申命記から列王記までの「申命  
記史」を初めに編纂した時代を、Cross (1973) に従い、紀  
元前七世紀末のヨシヤ王の時代とする。

- (28) オムリ王朝治世の反映については Timm (1982) を参照。  
この繁栄は考古学的にもよく検証されている。Finkelstein  
(2000) の近年の研究を参照。杉本(二〇〇五:二〇一―二二頁)  
は、北王国の領域にあった大規模な建築物をオムリ王朝に  
年代づける Finkelstein の理論に懐疑的である。筆者は、建  
築物の特徴をオムリ王朝に画一的に帰する Finkelstein の理  
論を全面的に支持してはいないが、メギド、ハツオル、サ  
マリア、イズレルなどで発見された同時代の大規模な建築  
物は Finkelstein が指摘するとおり、オムリ王朝が建設した  
ものであると考える。
- (29) ハザエルがヨラムを殺害した事実はおそらく事件の直後  
に北王国の人々の間で知られていたであろう。しかし、時  
が経つにつれて、イエフ物語のみが残り、事実の方はこの  
鮮やかな話と引き換えに忘れられてしまった。
- (30) 正当化は主に王下九章1―13節に見られる。
- (31) 王下一三章3、7節は一般に信頼できる史料と見られてい  
る(例えば Montgomery 1951:433) が、おそらく申命記史  
家による挿入節である。この点については場所を改めて論  
じたい。
- (32) この理論は、ハザエルとイエフが共にヤハウエ神の道具  
として言及されている王上一九章17節に書かれていること  
とやや食い違う。このことは、異国の王がヤハウエ神の道  
具として働くという考えが後代のものであることを示して  
いるかもしれない。

Ahituv, S. 1993. Suzerain or Vassal? Notes on the Aramaic Inscription from Tel Dan. *Israel Exploration Journal* 43:246-47.

Alt, A. 1953. *Kleine Schriften zur Geschichte des Volkes Israel*. Dritter Band. München.

Andersen, F.I and Freedman, D.N. 1989. *Amos*. New York.

Athas, G. 2003. *The Tel Dan Inscription - A Reappraisal and a New Interpretation*. (Journal for the Study of the Old Testament. Supplement series; 360. Copenhagen International Seminar 12). Sheffield.

Barre, L.M. 1988. *The Rhetoric of Political Persuasion: The Narrative Artistry and Political Intentions of 2 Kings 9-11*. Washington D.C.

Becking, B. 1999. Did Jehu Write the Tel Dan Inscription? *Scandinavian Journal of the Old Testament* 13:187-201.

Biran, A. 1996. A Chronicle of the Excavations. In: Biran, A., Ilan, D. and Greenberg, R. *Dan I. A Chronicle of the Excavations, the Pottery Neolithic, the Early Bronze Age and the Middle Bronze Age Tombs*. Jerusalem: 7-63.

Biran, A. 1999. Two Bronze Plaques and the *Husot* of

Dan. *Israel Exploration Journal* 49:43-54.

Biran, A. 2002. Part I: A Chronicle of the Excavations. In: Biran, A. and Ben-Dov, R. *Dan II. A Chronicle of the Excavations and the Late Bronze Age "Mycenaean Tomb"*. Jerusalem: 3-32.

Biran, A. and Naveh, J. 1993. An Aramaic Stele Fragment from Tel Dan. *Israel Exploration Journal* 43:81-98.

Biran, A. and Naveh, J. 1995. The Tel Dan Inscription: A New Fragment. *Israel Exploration Journal* 45:1-18.

Campbell, A.F. 1986. *Of Prophets and Kings. A Late Ninth-Century Document (1 Samuel 1-2 Kings 10)*. Washington.

Cross, F.M. 1973. *Canaanite Myth and Hebrew Epic. Essays in the History of the Religion of Israel*. Harvard.

Dijkstra, M. 1994. An Epigraphic and Historical Note on the Stela of Tel Dan. *Biblische Notizen* 74:10-14.

Dion, P.-E. 1997. *Les Araméens à l'âge du fer: Histoire politique et structures sociales* (études bibliques nouvelle série 34). Paris.

Dion, P.E. 1999. The Tel Dan Stele and Its Historical Significance. In: Avishur, Y. and Deutsch, R. Eds. *Michael. Historical, Epigraphical and Biblical Studies in*

- Honor of Prof. Michael Helzer*. Tel Aviv: 145-56.
- Finkelstein, I. 2000. Omride Architecture. *Zeitschrift des Deutschen Palästina-Vereins* 116:114-38.
- Gail, G. 2001. A Re-arrangement of the Fragments of the Tel Dan Inscription and the Relations between Israel and Aram. *Palestine Exploration Quarterly* 133:16-21.
- Haftorsson, S. 2006. *A Passing Power: An Examination of the Sources for the History of Aram-Damascus in the Second Half of the Ninth Century B.C.* (Coniectanea Biblica, Old Testament Series 54). Stockholm.
- Halpern, B. 1994. The Stela from Dan: Epigraphic and Historical Considerations. *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 296:63-80.
- Irvine, S.A. 1995. The Threat of Jezreel (Hosea 1:4-5). *Catholic Biblical Quarterly* 57:494-503.
- Irvine, S.A. 2001. The Rise of the House of Jehu. In: Dearman, J.A. and Graham, M.P. Eds. *The Land that I Will Show You: Essays on the History and Archaeology of the Ancient Near East in Honour of J. Maxwell Miller*. Journal for the Study of the Old Testament. Supplement series; 343. Sheffield: 104-18.
- Jepsen, A. 1934. *Nabi. Soziologische Studien zur alttestamentlichen Literatur und Religionsgeschichte*. München.
- Knauf, E.A., de Pury, A. and Römer, T. 1994. \*Bayt Dawid ou \*Bayt Daôd? Une relecture de la nouvelle inscription de Tel Dan. *Biblische Notizen* 72:60-69.
- Kottsieper, I. 1998. Die Inschrift vom Tell Dan und die politischen Beziehungen zwischen Aram-Damaskus und Israel in der 1. Hälfte des 1. Jahrtausends vor Christus. In: Dietrich, M. und Loretz, O. Eds. *„Und Mose schrieb dieses Lied auf.“ Studien zum Alten Testament und zum Alten Orient*. (Festschrift für Oswald Loretz). (Alter Orient und Altes Testament 250). Münster: 475-500.
- Lehnart, B. 2003. *Prophet & König im Nordreich Israel. Studien zur sogenannten vorklassischen Prophetie im Nordreich Israel anhand der Samuel-, Elia- & Elischa-Überlieferungen*. (Supplements to Vetus Testamentum 96). Leiden/Boston.
- Lipinski, É. 1994. *Studies in Aramaic Inscriptions and Onomastics II* (Orientalia Lovaniensia Analecta 57). Leuven.
- Lipinski, É. 2000. *The Aramaeans. Their Ancient History, Culture, Religion* (Orientalia Lovaniensia Analecta 100).

- Leuven.
- Margalit, B. 1994. The O'Arām. Stele from t. Dan. *Nouvelles Assyriologiques Brèves et Utilitaires* 1994/1:20-21.
- Miller, J.M. 1967. The Fall of the House of Ahab. *Vetus Testamentum* 17:307-24.
- Minokami, Y. 1989. *Die Revolution des Jahu*. Göttingen.
- Montgomery, J.A. 1951. *A Critical and Exegetical Commentary on the Book of Kings*. (Gehman, H.S. Ed.). Edinburgh.
- Na'aman, N. 1997a. The Historical Background of the Aramaic Inscription from Tel Dan. *Eretz-Israel: Archaeological, Historical and Geographical Studies* 26:112-18. (Hebrew).
- Na'aman, N. 1997b. Historical and Literary Notes on the Excavation of Tel Jezreel. *TA* 24:122-28.
- Na'aman, N. 2000. Three Notes on the Aramaic Inscription from Tel Dan. *Israel Exploration Journal* 50:92-104.
- Otto, S. 2001. *Jehu, Elia und Elisa. Die Erzählung von der Jehu-Revolution und die Komposition der Elia-Elisa-Erzählungen*. (Beiträge zur Wissenschaft vom Alten und Neuen Testament 152) Stuttgart.

- Puech, É. 1994. La stèle araméenne de Dan: Bar Hadad II et la coalition des Omrides et de la maison de David. *Revue Biblique* 101:215-41.
- RIHA - The Royal Inscriptions of Mesopotamia, Assyrian Periods*. Volume 1-3. Toronto.
- Šanda, E. 1911. *Die Bücher der Könige: Das Zweite Buch der Könige*. Münster.
- Schmitt, H.-Chr. 1972. *Elisa. Traditionsgeschichtliche Untersuchungen zur vorklassischen nordisraelitischen Prophetie*. Gütersloh.
- Schmiedewind, W.M. 1996. Tel Dan Stela: New Light on Aramaic and Jehu's Revolt. *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 302:75-90.
- Steck, O.H. 1968. *Überlieferung und Zeitgeschichte in den Elia-Erzählungen* (Wissenschaftliche Monographien zum Alten und Neuen Testament 26). Neukirchen-Vluyn.
- Tadmor, H. 1983. Autobiographical Apology in the Royal Assyrian Literature. In: Tadmor, H. and Weinfield, M. Eds. 1983. *History, Historiography and Interpretation. Studies in Biblical and Archaeological Literatures*. Jerusalem: 36-57.
- Timm, S. 1982. *Die Dynastie Omri. Quellen und*



イエフによるヨラムとアハズヤ殺害主張の背景 (長谷川)

- Untersuchungen zur Geschichte Israels im 9. Jahrhundert vor Christus*. Göttingen.
- Tropper, J. 1993. Eine altaramäische Steleinschrift aus Dan. *Ugarit Forschungen* 25:395-406.
- Wellhausen, J. 1905. *Prolegomena zur Geschichte Israels*. 6th edition. Berlin.
- Wesseliuss, J.-W. 1999. The First Royal Inscription from Ancient Israel: The Tel Dan Inscription Reconsidered. *Scandinavian Journal of the Old Testament* 13:163-86.
- Wesseliuss, J.-W. 2001. The Road to Jezreel: Primary History and the Tel Dan Inscription. *Scandinavian Journal of the Old Testament* 15:83-103.
- Würthwein, E. 1984. *Die Bücher der Könige. I. Kön. 17 - 2. Kön. 25*. (Das Alte Testament Deutsch 11, 2). Göttingen.
- Yamada, S. 1995. Aram-Israel Relations as Reflected in the Aramaic Inscription from Tel Dan. *Ugarit Forschungen* 27:611-25.
- Yamada, S. 2000. *The Construction of the Assyrian Empire: A Historical Study of the Inscriptions of Shalmaneser III (859-824 B.C.) Relating to His Campaigns to the West*. (Culture and History of the Ancient Near East, vol. 3). Leiden.
- Younger, K.L., Jr. 2005. 'Hazeel, Son of a Nobody': Some Reflections in Light of Recent Study. In: Bienkowski, P., Mee, C. and Slater E. Eds. *Writing and Ancient Near Eastern Society: Papers in Honour of Alan R. Millard*. (Journal for the Study of the Old Testament. Supplement series ; 426), New York/London: 245-70.
- 杉本錦俊 二〇〇五 「エヘン・ゲヅ遺跡 (イムラエール) の成立年代」『オリエント』第四八巻第二号、一―二七頁。

(テル・アビブ大学ユダヤ史学科博士課程)

## The Historiographical Background of Jehu's Claim as the Murderer of Joram and Ahaziah

by HASEGAWA Syuichi

Since its discovery, the Tel Dan Inscription has raised a question about the real murderer of Joram, the king of Israel and Ahaziah, the king of Judah in 841 BCE. According to this inscription, Hazael killed the two kings. This contradicts the Biblical story that ascribes these murders to Jehu. In the first place, this study reviews the scholarly debates on this question, re-examines their methodological validities, and then provides a possible answer to this query. In the second part, the study investigates why the false murderer claimed to be the slayer of the two kings.

Scholars have proposed harmonising solutions for the discrepancy between the two sources – the Bible and the Tel Dan Inscription. However, these solutions are not only incompatible with the historical situation at the time, but also methodologically invalid. The Bible is the secondary source which had been subject to redactions, whereas the Tel Dan Inscription is the primary source. Therefore, the priority must be given to the latter. Hence, the real murderer of Joram and Ahaziah could be identified with Hazael.

Jehu did not kill the two kings. This fact arouses a question, why the Bible ascribes the murders to Jehu. The part of the Bible, which describes the murders (Jehu Narrative), was composed at the royal court of the Dynasty of Jehu. This indicates that the murders were intentionally ascribed to Jehu. The entire Jehu Narrative emphasises Jehu's religious devotion to YHWH. From the viewpoint of the YHWH religion, Joram and Ahaziah were the dire rulers because their ancestor Ahab brought the Baal cult into Israel. It was thus important for the author to ascribe the murder of these apostate kings to Jehu. Another reason for the ascription of the murders to Jehu might have been the hostility against Aramaeans: Aramaeans vexed Israel until the later days of the Jehuite Dynasty. The author, who composed the original Jehu Narrative during this Dynasty, did not wish to ascribe the deed of killing the two kings to the Aramaean king, who brought hardship to the Israelites, but preferred to ascribe it to his compatriot king.